20180901 萌木の村　舩木上次様

23 歳の時に、ロックという喫茶店を始めたのがスタートで、今 69 歳。清里で生まれ育って仕事をしてきた。バブルで 30 年ほど前、清里は第二の軽井沢と言われ、乱開発された。清里駅前は坪 500 万円という時もあったが、それから転がり落ちるように衰退した。4 軒あったスーパーは無くなり、今あるのは 7-11 一軒のみ。坪 100 万円だったこの場所も今では坪 1 万円。

私が幸せだったのは、子供の頃に一番元気なころのポール・ラッシュ先生と触れ合う機会があったこと。人間は毎日生きている中で、何気ない判断をし続けている。小さなことまで数えれば、判断するのは 1 日 2 万回とも言われる。その判断の基準は何によってつくられているのか？

判断基準を作るものは大きく三つ、「出会った人」、「出会った場所」、「出会った時代」。

乱開発が始まったころ、私たちは観光を学びにドイツなど欧州へ行った。ミュンヘンで大きなガラクタ市を見た。オルゴールを鳴らしているおじさんが居た。その音に衝撃を受け、オルゴールを買い集め、清里にオルゴール博物館を作ろうと思った。そのガラクタ市のオルゴールは 70 万円もした。一緒にいた仲間はみんな、そんなガラクタ買うのを止めろと言った。良いと思うよと言ってくれたのはたった一人だった。なぜ私はオルゴールの音に衝撃を受けたのか？人は過去にインプットしたものに興味を持つ。ポール先生が子供の頃に、米国の映画や音楽に触れる機会を与えてくれていたからこそ、私はオルゴールの音に反応した。

子供のころに見た情景、感じたこと、私が今やっていることは、その時の原風景を再現しようとしているだけではないかと思う。

いろいろな分野の専門家と萌黄の村で庭を作ったりしてきた。小さいうちはうまくいっていたが、だんだんまともな形になると、いろいろな新たな専門家が集まってくる。また新たな専門家と相談して、また庭を造るのだが、いつも中途半端になってしまう。それを繰り返していた。フィールドバレエをやる広場は、毎年芝生がダメになって張り替えていた。本当に自然を守りたいなら、イベントをやってはダメ。イギリスの造園家に指導され、芝生は止めて、砂利を敷き詰め、その上にチップを敷くことにした。その造園家は日本が世界一美しかったのは江戸から明治時代と言った。江戸も田舎もすべてナチュラルガーデンだった。今のイギリスのイングリッシュガーデンは、日本のナチュラルガーデンの考え方を取り入れ作られた。それから百年でできた素晴らしいイングリッシュガーデンを見た日本人が、それを真似て日本に導入した。イギリスは日本のナチュラルガーデンの考え方を取り入れて成功したが、日本はイギリス

の庭に対する考え方ではなく、イギリスにある花を取り入れて失敗した。花や植物はそれぞれの地域に合うものがあることを無視している。

いろいろな人の話を聞いてやってきて失敗続きの私は、そのイギリスの造園家の話が素直に聞けなかった。実際に彼に頼んで庭を作った友人が、あいつの庭はダメだと言う。それでも始めてしまった。彼のやり方は、八ヶ岳から種を拾ってくることから始まり、それをポットで育て苗を育て、それを庭に植える。最初の 1，2 年は小さな苗なので、周りから雑草が侵入してきてボウボウになってしまう。その姿を見て彼の指導はダメだという人が多かった。しかしそれから 7 年、やっと植えた苗が力をつけ、周りの雑草の侵入をさせないようになって来た。

花作りは土作りだと思っていたが、土作りがすべてではない。堆肥を入れて微生物がいっぱいの土が好きな植物もあるが、そうでない植物もいる。植物はどこに植えられると良いか、どんな植物と一緒の植えられると良いか、彼はよく知っていた。今 440 種の山野草が萌黄の村にあるが、そのうちの 400 種は八ヶ岳のもの。地元のものがほとんどで、この土地に合うもの外から一部持ってきた。現在信州大学がハーブや香りの研究を企業と一緒にやり成功しているが、彼らが本当に自然な植物は萌黄の村にしかないと言っている。

私たちは枕木を苦労して集めて通路や階段を作っていた。それをイギリスの造園家はすべてダメだと、地元で捨てられている石を集めてきて石積みで作り直した。野面積みで段々畑のようにした。清里の周りはすべて田舎で、自然に満ちているように見えるが、野辺山や周りの農地は農薬漬けで、蝶にとっては地獄の地らしい。自然の山野草が繁茂する萌黄の村は蝶たちの休息の地となっている。

7 年目でやっとそういう庭ができてきたのだが、それは思えばポール・ラッシュ先生の考えていたこと。勉強してできるようになることも大切だが、自然にできるようになることが一番すごい。ドイツに一緒に行った仲間は、清里に帰ったら「ああしよう、こうしよう」と話していたのに、清里に戻ると、みんな現実に戻って「できっこない」になってしまった。ドイツで語った夢をやり続けようとしたのは私一人だけだった。ドイツで見たものを清里の人にもっと理解してもらうために、10 年間、清里の子供たちを留学生でドイツに行かせた。

京都の人は学歴が無くても品がある。金沢の人もそういうところがある。最近では小布施や湯布院もそうかもしれない。地域の、環境の力というものがある。そこにしか無い質の高い風がある。その風が清里には無いと感じている。

山梨には良い水がある。山梨にはサントリーの白州がある。世界一の大きいウイスキー工場。山梨はワインも日本一。うちのビールも 3 年連続日本一。技術と知識があれば、ある程度のものができるが、一番になるためには良い水が

必要。山梨にはここにしかない水がある。白州の水は花崗岩の影響で不純物が全く無い。スコットランドとも余市とも全く違う水がある。

草津や別府の温泉はすべて同じ泉質。山梨県の地盤は 4 つのプレートが重なっている関係で、地域によってに泉質が全く違う。それぞれの水の品質の違いに合ったもので何かを生み出せば、凄いものができる。山梨県の白州では、1,000 円から 70 万円までのウイスキーを作っている。それなのに山梨には 3 万ぐらいまでのウイスキーしか売っていない。良いものはすべて東京へ行ってしまう。山梨県は地元の良さを、価値を知らない。

ドイツの最高級保養地バーデンバーデンには高級ブランドショップしかない。チンケなお土産屋はまったくない。山梨県は地元で作った良いものはすべて東京へ流出している。

ある酒屋さんがマッカランのウイスキーを数年前に 4 万ケースを 20 億円で大量に買った。世の中にその酒が無くなったせいで、相場が上がり 400 億円になった。その人に言われた。

「しっかり儲けて地元に投資する人がいないと、清里は発展しませんよ。」

価値は自分で作るもの。それだけ、今だけ、その場所だけ、というものを作らなければいけない。

ワインは大体 1 ㎏の葡萄から 1 本のワインができる。高級ワインは何㎏もワインを使うわけではない。それが何百円から百万円の違いが出る。

価値はモノづくりをしている人が決めてはいない。価値はどう決まるのか。価値のルールを作る人たちがいて、価値のルールを作る人が儲ける。田舎は価値のルールを作る東京にすべて良いものを吸い取られている。

5 千円と 5 万円の酒の差は小さい。人間も同じ。ほんの小さな差がとても大きくなる。ゴルフの賞金でも賞金総額 5 億円と言っても、半分以上は 1 位と 2 位で持っていく。バレリーナでも世界最高峰の人は、日本一のバレリーナの 10 倍以上のギャラを取る。ゼロから 99 までは価値がない。100 になるかならないか。たった一点の差で、大きな評価の差になる。その差は 100 人に一人にしか分からない。しかしその 1 点で評価は 10 倍以上の差になる。

山梨のシャインマスカットは、山梨を出る時は 1,000 円か 2、000 円。それが東京の千疋屋では 2 万円になる。ルイ・ヴィトンは原価 5%。小金持ちが世界中で買っているが、大金持ちはルイ・ヴィトン本店で買う。本店は高く売れる。なぜ山梨で作った中で一番良いものを自分のところで売らないのか。スコットランドの蒸留所は一番良い酒は自分のところに残しておいて売っている。だから良いスコッチはスコットランドへ行かないと買えない。

山梨の街づくりを話し合う集まりがあった。そこに集まっている人たちが、本当の山梨の良さを知らない。山梨の一番良いものを知らなくて、山梨をより

良くなんてできる訳がない。誰が一番の宝石を作っているのか、どこが一番うまいワインやウイスキーを作っているのか。山梨のリーダーたちが山梨の良さを知らなくては始まらない。

昔は 3 万円や 5 万円もするウイスキーはビビって買えなかった。でも世界には 5,000 万円や 1 億円するウイスキーがあると知ったら、100 万ぐらい安いものだと思うようになった。一番上を知らずして、リーダーは務まらない。何事もピンを知らなくてはダメだ。

ポール先生の下で育ったお陰で、私は物おじしないようになった。ポール先生は人を能力の差で比較はするが、絶対に差別しない。そんなポール先生のお陰で、私は五感で感じて、そのまま行動できるようになった。頭の良い人は理論武装してから行動する人が多い。私は反対。だから音楽のことも分からないのに、平気で高価なオルゴールを売ってくれ！と物おじせずに言えちゃう。実はポール先生もそうだった。ただ最近は反省もしている。感性だけでは社員にきちんと伝えられないことに気が付いた。理論武装をできる人と組んで、これからはやっていきたい。